

学生は今、何故、

文学を学ばなくてはならないのか

加田 謙一郎

(二〇一八年一月三十一日受理)

キーワード 文学・小森陽一・ネット社会

一 本稿の背景

二〇一三年十月、鶴岡工業高等専門学校創立五〇周年記念行事の一環として、鶴岡高専総合科学科オーブンラボ【世界を記述する】が公開された。

これは現在の基盤教育グループ教員による、各教員の教育・研究の成果の一部を公開するという企画であった。

公開時、当時のグループ長であった窪田眞治教授の発案により、有志教員が同人誌「辺境より」を作成、来場者に無償配布した。本稿は、「辺境より」番号に寄稿した、「文学は何故、学ばなくてはならないのか」と題する論文の冒頭部分に、加筆修正を加えたものである。

六年も前の文章を、改めて世に問う理由は、三つある。

一つ目の理由は、学生たちを取り巻く状況の変化にある。六年前よりも遥かに広く、学生たちへスマートフォンは行き渡り、教室内での使用も以前とは比較にならぬほど浸透した。また、本校では授業改善の一環として、三年前から入学時に、タブレットを新入生全員に購入させてもいる。〈ネット社会〉に関わる学生が起すトラブルも、当然、増加した。この状況の変化は、六年前には想像もできなかった。

二つ目の理由は、本校の学生たちへ、〈ネット社会〉上でのマナーを指導する際に、その指導内容に対する理念的背景を、一つの「形」にしておきたかった、ということである。前述のような状況下で、担当している「国

語」「日本学特論」の授業の一環として、わたくし自身の言葉で語ることのできる「形」にしておく必要を、強く感じているからである。わたくし自身の学問の対象領域の言葉で、問題を語ることをしなくては、所詮、ありふれた、退屈なルール説明に終始するであろう。それは避けたい。その思いから、本稿を改稿する気持ちになった。

三つ目の理由は、昨今の高等専門学校においても重要視されている「教養教育」の有りようを考える際の、わたくしなりの具体例を示してみたい、と考えたことによる。

単なる知識の伝授に終始するのではなく、「既存の知識や技能と関連付けられ体系化されながら身に付いていき、ひいては生涯にわたり活用できるような物事の深い理解や方法の熟達に至る」(注一)ことを目標にした、今日的な「教養教育」の有りように沿って、「教養教育」の具体的な内容を示すことを試みてみたかったのである。

二 〈文学世界〉の成立

一九九三年の春、小森陽一は「文学の時代」という論文を、岩波書店刊行の「文学 季刊第4巻・第2号」巻頭に掲載した。《特集》は「メディアの政治力―明治40年前後―」であり、小森の論文は《特集》の基調論文として位置づけられるものであった。そこで小森は、森岡外の『青年』(注二)の冒頭を解析し、〈文学の時代〉の到来を考証している。

夏目漱石『三四郎』(注三)の主人公小川三四郎と同様に、『青年』の主人公である小泉純一は、上京する青年である。小森は、この二人の青年の上京の動機の相違に注目する。

純一が上京したのは、『三四郎』の主人公小川三四郎や、すでに上京していた同郷の青年たちのように、大学に入って勉強するためでも、「生産的な為事」につくためでもない。「詩人になりたい、小説が書いてみたい」という、「文学」者になる事を志望する、ほとんど漠然とした情動だけにつき動かされて彼は東京に出て来たのであり、そうであればこそ、最初に訪れる相手が、すでに「文学」者として名声を獲得していた同郷の大石路花という人物だったのだ。

小泉純一は、「東京方眼図」なる鴎外の作り出した虚構の地図を用いる。そして、同郷の大石路花の下宿を、迷うことなく、目指して歩く。そうした純一の歩行の有りようを、小森は、前田愛の指摘を引用して説明する。

三四郎と同じく上京する青年として設定された『青年』の小泉純一は、三四郎とはうらはらに東京という都市空間への恐れを体験することがない。彼は上京早々、文学の師とたのむ大石路花の下宿をやすやすと尋ねあてる。鴎外創案の『東京方眼図』を片手にした彼のたしかな足取りは、東京に生まれついた人であるかのように入組んだ街筋を領略する。

(注四)

小森は、「けれども、純一にとつての『紙の上の都市』は、『東京方眼図』だけではなかったことにも注意しておくべきだろう」と述べている。それは、新たに成立しつつあった新聞という「紙の上」のメディア、その中でも〈文学世界〉という「紙の上の都市」である。小森は、小泉純一の上京を、「紙の上の都市」成立の象徴のごとく捉えている。

新聞の「読書欄」の一地方読者が、自らもその欄における情報の発信者になるうとして上京することが、あたかもかつての東京への遊学が立身出世につながるということと同等であるかのように錯覚される時代が到来していたのである。それは、個別小泉純一における特殊な錯覚ではなかった。その錯覚がある程度共有されていればこそ、「資産のある家」である小泉家の両親が、独り息子である純一を上京させるための旅費や、「文学」者として成功するまでの生活費を出すことを承諾したのである。さらに大学で勉強している純一の友人たちが、彼の選択にさしたる異和感を表明していないことを見ても、「文学」者になるために上京するという選択が、当然のこととして首肯される時代になっていたことがわかる。

その上で小森は、明治四〇年代という時代が大阪朝日新聞や東京朝日新聞、そして「他の諸新聞も同じように懸賞小説を募集する状況」であり、それが「新聞というメディア全体を覆う一つの流れとして出来上がっていた」

と指摘する。「メディア全体を覆う一つの流れ」は、「一攫千金の要素」をも帯びた「漠然たる願望」に「それなりの現実性」をも帯びさせたことを証したのである。

三. 個人の社会へのまなざしの分業化・専門化

では、時代の申し子たる純一が憧憬している大石路花なる文学者は、純一が訪問しようとしているまさにその時、どのような行ないをしていたのか。小森は、大石の状態を以下のように簡潔に叙述する。

大石は朝食を「食ひながら座布団の傍にある東京新聞を拵げて、一面の小説を読」んでおり、それはほかならぬ自分が書いてある小説なのである。次に路花は他の記事には目もくれず、「自分の担当してゐる附録にざつと目を通す」ことになる。もちろんその「附録は文学欄で埋」まっている。そこでは「四五人」の限定された「記者」が、「第一流と云はれる二三人の作の批評文」を書いていただけなのだ。

大石は「東京新聞」の「一面」と「附録」だけを読んでもしうと、次に「外の新聞二三枚の文学欄文を拾読みする」のである。この記述からわかるのは、路花が少なくとも、異なる四紙をとっていたということだ。しかもそれはただ「文学欄文」を読むためのものであり、「文学欄」の情報以外は、彼の関心から完全に切り捨てられていることが明記されている。新聞を構成する種々雑多な報道の情報から、「文学」情報だけが「拾読み」される時代なのだ。

小森の指摘は、文学者の習性の把握に止まるものではない。近代人の根底にある、個人の社会へのまなざしの分業化・専門化の有りようの、典型的な例証であると言える。個人の社会へのまなざしの分業化・専門化は、明治四〇年代や、小森論文が発表された二昔前のみならず、現代日本の個人の有りようの変化に通ずる。自らが関心を持つ世界の情報のみ収集し、自らが関心を持つことができない情報はなかったものとして切り捨てるまなざしの有りようは、情報化時代・グローバル化時代と謳われている現代において、一層深刻な問題として捉えなくてはならない。

無反省な個人の社会へのまなざしは、以前より情報収集源を拡大したという錯覚によって、知らぬ内に自閉する危険性が増しているからである。自分の欲しい情報を得る機会も増加するが、同時に、無意識に切り捨てている情報もそれに比例して増加する。現代日本を生きるわたくしたちも、この危険性に身をさらしている。小森による次の指摘は、大石や純一、その周辺の文学者とその予備軍の、時代の中での有りようを明確にする。

東京で発行されている新聞の、一地方読者に過ぎなかった純一が、上京後の最初の訪問先として大石路花の家を選び、それを「東京方眼図」で捜すという身振りは、当の大石が外部からの情報ではなく、自分が発信した情報としての小説を、新聞の紙面でまず確認するという自閉的なしぐさと呼応していたのである。新聞における「文学欄」の自立は、とりもなおさずその「欄」の枠内で供給と需要が一つの市場を形成し、現実の世界や日本国内で生起する諸出来事や事件とは無関係に「文学世界」とでもいふべき内部をつくりあげてしまったことを証している。小説を書くことが、日露戦争後の不況下で、いわば資本金なしに世に出ることを可能にする営為となったのであり、それは小説や戯曲といった「文学」作品が、その商品としての姿をくつきりとあらわにした、ということでもある。「文学欄」に登場する「四五人の限定された記者」と「第一流と云はれる二三人」とは、このような新聞というメディアによってつくられた、「文学世界」において成功をおさめ、有名になった新しいタイプの立身出世者たちであったのだ。

大石を含む「四五人の限定された記者」と「第一流と云はれる二三人」で形成された「文学世界」の住人は、「外部からの情報ではなく、自分が発信した情報」を「新聞の紙面でまず確認するという自閉的なしぐさ」をする。彼らは、自らが関心を持つ世界の情報のみ収集し、自らが関心を持つことが出来ない情報はなかったものとして切り捨てるまなざしの者たちであったのだ。

ここで小森の言う「外部」という言葉について考えてみる。小森の言う「外部」とは、当然「文学世界」の外の世界のことである。「現実の世界や日本国内で生起する諸出来事や事件とは無関係」ではあり得ない世界である。換言すれば、自らが関心を持つことができない情報はなかったもの

として切り捨てるまなざしの有りようでは、決して捉えることができない世界である。

大石は「少なくとも、異なる四紙」の新聞をとっていた。しかし、眼前にある四紙から、大石が「種々雑多な報道の情報」と捉えた「外部」情報を、何の痛痒もなく切り捨て、「外部」から自閉する姿は、情報収集の有りようを考える際に、近代人として個人の社会への関わり方を分業化・専門化せざるを得ないわたくしたちへ、重要な問いかけをしている。

それは、「本当に、わたくしたちは、わたくしたち自身にとって、情報を過不足なく適切に収集していると言えるのか」という問いかけである。

四．情報発信の有りようと文学を学ぶこととの関係

投げかけられた問題は、情報の収集の有りようだけではない。情報の発信の有りようの問題でもある。

明治四〇年代に、「文学世界」の成立へ新聞が果たした役割を、現在は、インターネットが果たしていることは容易に首肯できよう。小森の表現を借りるならば、インターネットの普及による「ネット世界」の成立は、とりもなおさずその枠内で発信者と受信者が不可分のものとなり、「現実の世界や世界で生起する諸出来事や事件とは無関係に」「ネット世界」とでもいふべきバーチャルな時空間をつくりあげてしまったことを証していると言える。

電子メールやホームページ、ブログ、ツイッターやフェイスブックに書き込むことが、バブル経済崩壊後の「不況下で、いわば資本金なしに世に出ることを可能にする営為」と錯覚されるようになったのであり、それは「ネット世界」が新しい自己表現の「場」としての姿をくつきりとあらわにした、ということである。

「新聞」の「文学欄」とは異なり、誰であっても、情報を発信したいと欲すれば、第三者の手（例えば、同人雑誌の同人からの批評、商業雑誌の編集者の意向・意見など。究極のところ、行政機関による検閲も含むと考える。）を経ることなく即座に情報発信できるという点で、インターネット利用者が「資本金なしに世に出ることを可能」にしたのである。「資本金なし」ということに関しては、第三者にチェックされることがないと

いうことを意味する。情報発信者としての資格と、発信する情報そのものの質・価値が問われなくなったということである。誰が何を書いても、「ボツ(没)」にされることなく、思うがまま情報を発信できるということである。

そのような「場」は、インターネット利用者が、「外部からの情報ではなく、自分が発信した情報」をネットの上「でまず確認するという自閉的なしぐさ」を行なう、自らが関心を持つ世界の情報のみ収集する、また自らが関心を持つことが出来ない情報はなかったものとして切り捨てるまなざしを持つ人たちを、大量に生み出す危険性を増大させることになった。明治四〇年代の新しいメディアであった「新聞」と、現在普及している新しいメディアの「インターネット」は、受益者のまなざしにも大いに影響を与えている点で、時代を超えた相似形を成す。時代の寵児となった新しい自己表現の「場」が、同時に新しい自己自閉の「場」に化する危険性は、十二分にあると考える。

それ故に、現代であっても、もしくは現代であるがこそ、表現の有りようを示す存在である(文学世界)は、学ばれなくてはならない。(ネット世界)において、日々行なわれている無数の書き込みは、その一つ一つは断片の域を出ないものが多いにしろ、現代という時代を映す鏡である。現代という時代を記述する言説には、敢えて言えば自己表現、文学的表現の萌芽を多分に含むことも、十分に推量できるからである。

(ネット世界)への発信者は、どのようなレヴェルであれ、自己の、そして他者の表現に関して、無関心ではいられない。その意識を持つことこそが、文学を学ぶという意識の第一歩なのである。

大石路花は、「外部からの情報ではなく、自分が発信した情報」を「新聞の紙面でまず確認するという自閉的なしぐさ」を行なった。現在、(ネット世界)に書き込みをする人も、「外部からの情報ではなく、自分が発信した情報」を「まず確認する」である。そのしぐさが「自閉的」とならないように、自らの書き込みの豊かな可能性と大きな危険性を自覚し、自らの表現を確立させるために、迂路とは見えるが、文学というものを意識し、学ばなくてはならない。「自分が発信した情報」を「まず確認する」ことも、文学を学ぶことの範疇内にある営為である。情報発信者たちと情報受信者たちが、その営為を、無自覚に行うか、自覚的に行うのかは、今後の(ネット世界)を考える上で、最も大切な問題になると、わたくしは

考える。

五. 教養教育の陥穽

教養を教育することは難しい。

単なる知識のみを積み重ねても、それを教養と呼べないことは、明白である。教養教育は、アカデミックな様相を保ちつつも、同時に、「知識が形成される瞬間」に立ち会う喜びと「知識が世界とつながる」感動を、学生たちに喚起する行為でなくてはならない。知的作業と情動が溶け合う、真に生き生きとした行為でなくてはならない。学問の厳肅さとともに、学ぶ喜びと感動のきっかけをも、学生たちへ与えることを目指さなくてはならないのだ。

この厳肅な綱渡りとも言うべき教育の陥穽は、今日を生きる教員自身が、知的にも情動的にも、ルーティンワークに流される危険性だと言える。業務に倦んで、擦り切れてしまつてはならないのである。答えのない質問に耐える力が必要なのだ。

それ故に、日々、教員自身が困難を深く自覚し、アカデミックな世界と情動が渦巻く世界とを、生き生きと行き来することこそが、教養教育の質を保証することにつながると、わたくしは信じる。

注

注一 平成二十七年八月二十六日付「教育課程企画特別部会における論点整理について(報告)」1、十六頁の②学習活動の示し方や「アクティブ・ラーニング」の意義等による。文部科学省ホームページ、二〇一八年一月三十一日現在。

注二 スバル、一九一〇年三月〜一九一一年八月。

注三 朝日新聞、一九〇八年九月一日〜十二月二十九日。

注四 前田愛、『都市空間のなかの文学』、筑摩書房、一九八二年。